

おっパブ副業してたら毒舌後輩（一九〇センチ）に見つかって、

溺愛えっちでトロトロになるまで追い詰められました

社会人二年目の深夜、上司に押し付けられた残業を虚な目でこなしながら、私はこう思った。

（湖のほとりに住みたい）

静かな湖面。森のゆらめき。鳥のさえずり。

現実逃避に近かったとは思う。残業そつちのけでスマホを引っ掴んだ私は、あらゆる情報を調べ上げた。

そうして、一つの解へと辿り着いたのである。

「これだ……」

いわゆるFIREというものだった。

給与のほとんどを投資に注ぎ込み、不労収入の目処が立ち次第、早期リタイアをするという生き方だ。

（まずは投資のための資金がいる。資金を調達するには……）

社会人二年目の深夜、自分のおっぱいを引っ掴みながら、私はこう

決意した。

(そうだ、おっパブで働こう！)



というわけで私は、会社から乗り換えが必要な場所にある『色っぱい街』で、副業としておっパブ嬢している。

「失礼しまーす、マキでーす」

加えて、『ディープリキス有り』『乳首舐め有り』など少しハード目な店を選ぶことで同僚に見つかるリスクを減らした。

そもそも職場の男性は揃いも揃って草食系なのだ。キャバクラや

ソープならまだしも、セクキャバで遊ぶという選択肢はないだろうと私は踏んでいた。

そう、踏んで『いた』。

「……どうもこんばんは、榎子さん」
のだが。

「二七歳にもなってセーラー服とは、なかなかの勇氣ですね」

「おっ、近江くんっ……!？」

まさか同じ課の毒舌後輩に見つかってしまうなんて、一体どんな確率だろうか。

「似合ってはいますよ。写真撮ってもいいですか？」

「い、いいわけな……!」

近江くんは嫌味か冗談か分からないことを言うと、いつもの「すん」とした表情でボーイにこう続けた。

「すみません、彼女を場内指名します」

「!?」

まさか同じ課の毒舌後輩におつパブ副業が見つかった上、場内指名されるなんて一体どんな確率以下略。

「あと、彼女の退勤時間まで延長で」

挙げ句の果てに退勤時間まで延長なんて、以下略。

「ちなみに、VIPルームっていま空いてますか？」

い、以下略！



同い年のボーイ・上田くんは「ありがとうございます！　ごゆつくりどうぞ！」とニコニコとVIPルームを後にし、最後私に向かって親指を立てた。

「やったじゃん！」みたいな顔。全然やってないよ、むしろやらかしてるよ。夢ならとつとと覚めてくれ。

「な、何を飲まれますか……」

「適当にその入れてください。お酒でいいんで」

「ハイ……」

VIPルームのソファにどかたと座った近江くんは、なんだか少し怒っているようだった。

一九〇センチの彼は、隣に座るの改めて『大きい』。普段、平均身長らへんの男性を同じソファで相手にしている分、容易に対比できてしまった。

加えて、彼は彫刻のように端正な顔つきをしているのだ。普通にちよつと怖かった。

「どうぞ……」

適当に水割りを作って、近江くんの前に置いた。目を合わせようとしない私をじつと見つめながら、近江くんはズバツと核心を言う。

「うちの会社、副業禁止ですよね？」

「本当に勘弁してください……！」

核心すぎる発言に、思わず両手を合わせて懇願した。恐る恐る顔を覗けば、綺麗な二重の瞳が私の姿を舐め回すように見ていた。上から下まで、じつとりと動いていく。

「似合ってるとはいえ、恥ずかしくないんですか？　ヘソ出しセーラー服って……」

「べ、別にこれは趣味でやってるわけじゃ……！」

「しかもノーブラなんでしょ？」

「っ……!!」

近江くんは自身の膝を肘置きにして、私の胸を指差した。

この場では当たり前のことだけど、言うまでもなく職場では当たり前ではないことだ。羞恥心なんてとつくになくなっていると思っていたのに、近江くんに指摘された途端、急激に恥ずかしくなってきた。

「俺たちの憧れの槇子さんが……おいたわしい」

「絶対に憧れてないでしょ……!!」

可愛くない後輩すぎる。

嫌味つたらしく言われたから言い返すと、近江くんはまたため息をついた。

「俺はともかく、俺の同期女子からは憧れの的ですよ。ドライに仕事をするけど、ちゃんと優しい槇子さんって。笹本とか」

「具体的な名前出さなくていいから……なんか罪悪感が……」

「そもそも、なんでこんな副業を？ 金に困ってるわけではないですよね？ 前に投資の話してたし」

「あ、えーつと……」FIREで聞いたことある？ ほら、投資ガチつて、仕事から早期リタイアするやつ。あれがしたくて……」

「どんだけ仕事したくないんですか」

「いやー、だって女の身体でお金稼げるのも数年しかないし。これが一番タイパいいかなーって」

「……クソみたいな合理主義ですね」

「先輩に向かってクソとはなんですか」

近江くんの毒舌には慣れたものである。いつものように返すと、近江くんは呆れた顔のまま言った。

「で、この『女の身体を存分に使った副業』もドライにやられてる

と？」

「い、いちいち棘があるなあ……」

「ちようど腑が煮え繰り返ってるもんで」

「なんでそんなに……」

「大体分かるでしょ」

「え？」

「いい歳した大人なら、そんなことくらい察してくださいよ」

「ええっ？」

「分かるでしょ」って、え？　そういうこと？　実はそうなの？

近江くん、私のことを好きだったりするの？

「う、うつそだあ」

「何でそんな嘘をつく必要があるんです？　場内指名した上に金を上乘せしてVIPルームに隔離して、退勤時間まで居座ろうとしてるん

ですよ？ 自分で言うのもなんですが『俺が』ですよ」

「……！」

「俺が」というのに、ひどく納得してしまった。

近江くんといえば、誰に対しても媚びることがない毒舌キャラである。

ただし表現が厳しいだけで、言うことはいつだって正しい。おまけに仕事だって難なくこなすから『可愛くない後輩』として可愛がられるタイプの後輩だ。

だから「あの近江くんが！ 確かに！」という変な納得だった。

「え、えっと……」

途端に、また恥ずかしさが襲ってきた。

目の前にいる彼が、急に『男性』になってしまった。太い客でもなく、可愛くない後輩でもなかった。

いい歳こいてヘソもパンツも見えるようなセーラー服を着て、知らない男におっぱい触らせて金銭を得ている私を。近江くんが。

「ここ、結構なんでもやっていいんですね」

戸惑っている私をよそに、近江くんは周りを見渡した。

セクキャバのVIPルームは、衝立や薄いカーテンで半個室になっているだけで完全個室ではない。

だから隣のVIPルームでは同い年のキャストが「あんっ……♡ あっ、いい……♡」と喘いでいるのだって、耳を澄ませずとも聞こえてくる。

何をしているか丸分かり……とまでは言わないが、ほとんど前戯のようなことをやっているのは自明だろう。彼女は「本番有り」だと自ら言っていたし、正直、店側も黙認しているのだった。

「い、いや、それはキャストによって違うから……」

「でも、キスも舐めもオッケーなんですよね？　そもそも、そういうのを楽しむ店ですしね」

改めてお店のシステムを確認した近江くんが、私を見据える。固まってしまうと、彼は命令するように言った。

「乗って」

幾度となく客に言われた言葉も、近江くんの声で言われると心臓が苦しいほど跳ね上がった。

だって、後輩だ。

隣の隣の席だし、同じプロジェクトに関わっているから明日も明後日も同じ会議で顔を合わせる。直属とも言っていい後輩なのだ。

「や、でも……っ」

「金のために、ドライにやられてるんですよね？」

「！」

「なのに、金を落とす客を拒否るんですか？」

「だ、だって」

「NGもキャストの権利ですから無理強いはしませんけど。まあその場合、俺の匙加減でこちらが本業になる可能性も……」

「……！」

つまり「会社バラしてもいいんですか？」と言っているのだ。

意地悪すぎる。可愛くなさすぎる。それが好きな人にやることだろうか。いや、好きだからシたいのか？

（わ、分からない！ 分からないけど、とにかくにも会社バラされるわけにはいかない！ それだけは、絶対！）

「しっ……失礼します……」

仕方なく、いつもの挨拶を呟きながら近江くんの身体に跨った。

「……！」

肩を掴んだだけで分かる。やっぱり、大きい。

今までいろんな男性に跨ってきたけれども、その中で多分一番身体が大きい。体重をかけないように気を遣う男性も少なくない中、彼には安心して身体を預けられると思った。

が、それとこれとは話が別だ。

(近江くんの匂いがする……！)

柔軟剤の香りだった。その香りに引つ張られるように会社のデスク周辺が脳裏にチラついて、なんだか気が気でない。

良くないことをしているような感覚だった。もちろん、会社で言えることではないから「良くないこと」には違いないけれど。

「……」

「な、なんですか……」

目の前の近江くんがじいっと私を見てくるから、つい敬語で聞いて

しまう。

近江くんの顔は私の眼前にあった。さすが一九〇センチだ。

いつもなら男性の顔を見下ろすような体勢になるから、なんだか恥ずかしかった。恋人と対峙しているような距離だと思った。

「……今まで、何人の男に同じことしたんですか？」

「え……っ」

「まあ、ドライにやってるなら覚えてないでしょうけど」

「ひゃっ」

近江くんの大きくて暖かい手が、セーラー服の中に入ってくる。そして躊躇いもなく、私の無防備なおっぱいをふにふに♡と揉んだ。

近江くんに揉まれているからか、平均よりずっと広い掌に揉まれているからか、心臓がバクバクとうるさくなってしまう。

「随分と可愛らしい反応ですね。男が喜びそうな」

「な、なんで触っ……!」

「なんでって、こっちは客なんだから当然でしょ。何かおかしいことでも?」

目の前にある近江くんの顔が少し近づくと、額同士がくつついた。思わず目を逸らす。

本当に、心臓がうるさい。今まで多くの客に言ってきた「ドキドキするね」が純然たるリップサービスだと改めて思った。

「槇子さん」

名前を呼ばれて、ゆっくりと近づいてきた唇にキスをされる。思ったよりも柔らかい唇が、端的に言うところ「ドキドキした」。

いつの間にか冷えていた唇は近江くんの体温で溶かされて、その隙間からもっと暖かい舌がにゆる♡とやってきた。私の歯をこじ開けたそれに、舌をくちゅ♡と絡め取られる。

「は……っん……♡」

がつつくことをしない、優しい舌だった。

つい、他のお客さんと比較してしまう。クチュクチュと音を立てる方がエロいと思っっているような男性が少なくないの、近江くんの舌はそんなことは二の次とでも言うようだった。

ただ、味わいたい。そんな動きだ。

（なんか、変な感じ……っ♡）

何が『変』だったのか自分でもよく分からない。居ても立ってもいられないような気持ちで、近江くんの服をきゅうと掴んだ。

すると私の腰を抱き寄せていた近江くんの手が、背中をすり……♡
すり……♡と撫でてくる。くすぐってくるような仕草に、ぴくつと身体が震えてしまった。

「……知らない男と、こういうことしてたわけですよね？」

叱るような口調で言われ、何かを反論する前にまた唇を塞がれた。

キスの合間に、近江くんが「頭おかしくなりそ……」と呟く。いろんな感情が入り混じった声だった。

頭がおかしくなりそうなのは、私だってそうだ。こんな風に、重たい感情をぶつけてくる客はいない。せいぜい数日分の性欲をぶつけられるくらいだ。

だというのに、後輩の「近江くん」が。

「槇子さん」

私の名前を呼んだ近江くんは、大きな手のひらでお尻を掴んだ。そのまま少し力を込め、湿った私のおまんこにぎりっ♡としたモノを押し付ける。

「……っ！」

硬い。大きい。

目が合つてしまうと、近江くんは荒い声で「分かる？」と聞いた。分からせようと押し付けてきたくせに、なんといやらしいことだろうか。

「嫉妬と興奮でどうにかなりそうですねですけど」

「そんなこと言われても……っ」

「おっぱい見せて、槇子さん」

「え……！」

「真面目に仕事してくださいよ」

本当に、こんな羞恥心はすでに消滅したと思つていのに！

ボタンを外す手が震えた。それでも近江くんは私のお尻を押さえつけながら、私の指の先をガン見している。

（これは仕事、これは仕事、これは仕事……！）

今まで幾度となく唱えた呪文を繰り返し、暴れる心臓を隠しながら

おっぱいを晒した。

近江くんはガン見をやめない。うっとりとしたような目つきで、緩く笑っていた。

「すごい綺麗」

「か、感想言うのやめて……」

「デカいんだろうなとは思ってたけど」

「そんなこと思ってたの……!？」

「思ってたし抜いてました」

「い、言わなくていいからっ」

考えたこともなかった性事情を暴露されて、思わず少し大きな声を出してしまった。近江くんは笑う。

「想像より綺麗です」

「だから……っ」

「あと、エロい」

「あッ♡」

ピンっ♡

近江くんの親指が乳首を弾く。少し弾力を持っていることが自分でも分かってしまい、恥ずかしい。声が出てしまったのだってそのせいだ。

「可愛い乳首ですね。声も。俺の脳を焼き切る気ですか？」

「し、知らな……っ」

「本当、他の男のことを思うと頭がおかしくなりそうですよ」

ピンッ♡ ピンッ♡ ピンッ♡ ピンッ♡

さっきまで余裕ありげだった顔を少し歪ませた近江くんは、両方の乳首を親指で弾いていく。一定のリズムが、次に来る刺激を教えるから目を離せなかった。

「んッ♡ あッ……♡」

「エロい声。いろんな男に開発されちゃってるじゃないですか。俺たちの槇子さんが……おいたわしい」

「そ、んなこと……っん♡」

「会社では見たことない顔してますよ。乳首気持ちいいって、顔に書いてある」

「っ……♡」

「可愛い」

すぐ近くに近江くんの顔があるせいで、赤くなった顔を隠せない。私の表情を見た近江くんはちゅっ♡と唇を押し付けてきた。

「んっ……♡」

「にしても、若いうちに投資しまくるため、ですか」

カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡

再び顔を歪ませた近江くんは、言いながら両方の乳首を人差し指で引っ搔いた。さっきまで横にスライドされていた刺激が縦になっただけなのに、一層高くなった声が「ツん♡」と溢れてしまう。

「それだけのために」

ぎゅむっ♡

今度は引っ搔かれていた乳首を摘まれる。「んあッ♡」と快感を隠せない声で鳴いてしまうと、近江くんは私を睨みつけた。

「こんな格好してこんなやらしい仕事してるんですか？」

ぎゅうううう♡♡

叱りつけるように乳首を押し潰されて、思わず背中が反っていく。

近江くんの指はやっぱり平均よりもずっと大きくて、私の小さな乳首は屈服させられるしか選択肢がなかった。

「や、やめ……ッ♡」

「本当アンタって人は……ドライすぎていつそアホというか……」

乳首を強く摘まれたまま、ため息をつかれる。近江くんの目は怒りと呆れの温度で私を見つめていた。

「そりゃ、稼げるでしょうよ。おっぱいも唇も好き放題されるんですから」

「ひうつ……♡」

ぐにつぐにつ♡♡

近江くんの指が、強弱をつけて乳首を押し潰す。

乳首の皮膚全てを近江くんの指に覆われているようだ。どこもかしこも近江くんの体温が伝わってきて、動かされるたびに膣の奥がきゅうん♡と小さくなった。

「だからって選ぶか？　普通。いや、アンタらしいっちゃらしいけど」

「んうッ……♡ あっ♡ や、め……ッ♡ てッ、ん♡」

「腹立つな」

乳首をぐにゅ♡ぐにゅ♡と揉みしだく近江くんは、そう怒りながら私にキスをした。大きな舌に襲われて、小さな喘ぎが近江くんに吸い込まれていく。

「ふあっ……ん……ッ♡ あ……っ♡」

「じゃあ、今日の俺は上客ですよね？」

声も目も、確認するまでもなくキレていた。

私に触れれば触れるほど、近江くんはヒートアップしているようだった。「何故か」なんて、近江くんが言うように大人だから分かってしまう。

「好き放題させてもらいますよ？」

「え、あ……ッ♡ ひあっ♡」

ちろっ♡　ちろっ♡

私の腰を抱き寄せ、潜り込むような体勢になった近江くんは熱い舌先で私の乳首を小さく舐めた。べえと出された舌が、繊細な動きで乳首の頂点をちろ♡ちろ♡と弄ぶ。

「んっ♡　あ……っ♡　近江、くんっ……っあ♡」

「こっちは念願の槇子さんのおっぱいなんで。堪能させてもらいます」

舐められていない方のおっぱいに、近江くんの手が這ってきた。乳房の重さを確かめるように揉まれ、かと思えば指でくりくり♡と勃起しきった乳首を弄られる。

「あ……っ♡　んっ……、　ひう……っ♡」

片方の快感に喘げば、もう片方の乳首が舌でれろれろ♡と虐められた。近江くんの仕草はまさに「堪能」そのものだ。

（近江くんが、私のおっぱいを楽しんでる……っ♡）

やっぱり近江くんにされると、いつもとは全くの別物だった。腰をもものすごい力で抱き寄せられるから逃げ場もなく、私は近江くんの舌と指にピクピクと肩を震わせるしかない。

「あッ♡ は、んう……っ♡」

「あーたまんね」

「お、おうみく……ッあ♡」

近江くんは、時折私を見上げる。もう本当に、好きで好きでたまらないという顔だった。

近江くんってこういう顔するんだとどこか冷静な私もいれば、クリトリスに押し付けられる膨れ上がった怒張に腰を反応させてしまう私もいた。正直、危うい。

（近江くんのおちんぽ、ずっと硬い……っ♡ しかも絶対巨根だ……）

このままじゃ、腰カクカクって動いちやいそうっ……♡)

もちろんそんなことをするわけにはいかない。

先輩としての威厳もあつた。なけなしの先輩らしさを引っ張り出し、近江くんに言う。

「み、見ないで……っ♡」

「なんで？ 他の男には見せてるのに？」

「だって……ッ、ん、ッあ♡」

「俺にも見せてよ、槇子さんのエロい顔」

「あ、もッ……♡ は、恥ずかしいから……んッ♡」

「いつもこんなに感じてんの？」

末尾に「他の男に」とついてきそうな圧だった。違うと言うのも恥ずかしくて、黙って首を振る。

「じゃあ、俺だから？」

「や、やだっ……あ……ッひ♡」

「答えになってないんすけど」

近江くんの硬い舌が、私の乳首をぐりぐり♡と押し潰した。乳首がおっぱいに埋め込まれてしまっても近江くんはそれを追いかけて、舌の先で虐め続ける。反対の乳首を弄る指だって、少し圧を強めていた。

「あッ♡ や、だめえっ♡ んうッ……♡」

「俺だから感じてるの？ 槇子さん」

れろお……っ♡

乳首を虐めていた舌が、今度は乳輪に沿っていやらしく周り始める。私をじつとりと見てくる近江くんの目は笑っていた。私の答えが解ってる顔だった。

「ねえ」

「あんっ♡」

今度は油断していた隙にぺろっ♡と乳首の先を舐められて、媚びたような声が出た。

完全に遊ばれている。先輩ぶった顔をしながら、私は彼の指と舌にちゃんと感じてしまっているのだ。それを、近江くんもちゃんと解っている。

「は……可愛い」

ちゅうッ♡　ちゅぱっ♡　ちゅぱっ♡

馬鹿にしているのか恍惚しているのかよく分からない声で、近江くんは乳首を甘く吸い上げた。

キスを落とすような音が、ちゅぱッ♡ちゅぱッ♡と何度も繰り返される。近江くんの肩に置いた手に、自然と力がこもっていった。

「んあッ♡　あっ……♡　や、それっ……♡」

「他の男に見せないで」

「ッ……♡」

お願いするように呟いた彼は、もう片方の乳首を親指と人差し指で摘んでこりこり♡と弄ぶ。

「んっ、ひッ♡ あ、やあ……ッ♡ お、近江くん……っ♡」

「槇子さん」

ぢゅぱっ♡ ぢゅぱっ♡ ぢゅぱっ♡ ぢゅぱっ♡

いやらしい音と快感に、下着がどんどん濡れていく。その下にある近江くんのおちんぽはずっと硬いし、ぷくっ♡と弾力を持つてしまっているクリトリスにきちんと当たった。

どうしても、腰が揺れてしまう。それが乳首に与えられる快感のせいか、私の意思によるものなのか最早分からない。

（動いちゃ、ダメなのに……ッ♡）

後戻り出来なさそうな言葉が浮かんた直後、ホールにボーイの声が響いた。ガビガビのマイクで叫ぶのは、ベテランの岸さんだった。

『いらつしやいませ、ありがとうございます！ 皆さまお待ちかね、ハッスルタイムのお時間がやってまいりました！』

近江くんの瞳の位置が分からなくなるほど、照明が暗くなる。ドンドンと重低音の音楽が鳴り響き、ミラーボールがチラチラと光った。

近江くんの眼差しは、その華美な光とは対極にあるものだった。

「何を、シてくれるんですか？」

「っ……」

私は隣のブースにいるキャストのようないわゆる『本番行為』は絶対にしないと決めている。長期的にはコスパが悪いからだ。

だから「ハッスルタイムにおいては積極的になる」というのが私の手法である。刺さる人にはきちんと刺さり、コスパが良い。

（でも、それを近江くん……!?）

「マキさん」

あえて源氏名で呼ぶ近江くんは、頭がくらりとした。

迷っているところにしつかりと急かすようなことをしないでほしい。

（何でこんなことになってるんだろう）

そんな言葉ばかり出てくるけど、掻き消すようにいつもの呪文が脳内に響いた。

（これは仕事、これは仕事、これは仕事）

……ああ、だから「ドライ」なんて言われてるのか。

急に何かが腑に落ちると、腰が勝手に動いてくれた。

これがドライな感情によるものなのか、否定できない欲によるものなのか、そんなことはもうどうでもいい。

今この瞬間、このホールはハッスルタイムなのだ。するべきことは決まってる。

「ん……ッ♡」

近江くんの太くて硬いおちんぽに、自分のおまんこを擦り付けるように腰を動かした。全てが平均より大きい近江くんのおちんぽは、期待以上の長さで期待以上の太さだった。

（すっごい……♡ おっきい……ッ♡）

月並みな感想だけど、そうでしかなかった。

「はは……エロ」

近江くんは、スカートに隠れている私たちの下腹部を眺めて笑った。

私は近江くんの言葉に返せる余裕がない。いつもなら「こんなもの」として処理できる快感が、そうもいかないのだ。腰を動かしてい

るのではなく、動いてしまう。本能的な動きだった。

「あ、っ……♡ はッ、んう……っ♡ あ……♡」

硬いし、大きい。近江くんのおちんぽは私の割れ目にぴつとりとくつついて、否応なしにクリトリスをしっかりと擦った。

もう下着はとつくの昔に誤魔化せないほど濡れているし、おまんこの奥だってジクジクと切なくなっていた。「こんなのダメなのに」と思いながらも、私の腰は快感を求めていやらしく前後に動いてしまっている。

「イイとこ当たってる？ 槇子さん」

私の自分勝手な欲に気付いたのか、近江くんは揶揄うように言った。私の腰を掴む手に力が込められて、それだけなのにぞわぞわと背筋がくすぐったくなる。

「や、やめて……ッ♡ はあっ……♡」

「エロい声出してゐるから。俺のちんぽでオナニーするの気持ちいい？」

「も……っ、やめてっ……♡ んっ、あ……ッ♡」

「すげえ熱い。俺のズボン、槇子さんのお汁で濡れちゃってない？」

「っ……♡」

「冗談だよ。いいよ、濡らして。もっと腰動かして」

鞭と飴のような言葉のあと、近江くんは私のお尻をがっしりと掴んでゆさゆさ♡と揺らした。

「ああっ♡ やあ……ッ♡」

男性の力でおちんぽにクリトリスを押し付けられ、一層高い声を出してしまう。キスをされて、再び近江くんの舌に自分の舌を奪われた。

「んうっ……♡ は……♡」

「可愛い……」

うわごとのような近江くんの声に、周りの席からの「あんっ♡」「いいよお……ッ♡」という声が重なった。

快感を貪り合うという点では同じことをしているのに、どうしてこ
うも「私たちは違う」みたいな気持ちになるんだろうか。客と嬢。一
緒であるはずなのに。

『さあさあ、もっともっとハッスルしてください！ 本日ハッスルタ
イム増量しております！』

何人かいるであろう本番中の声を掻き消すように、岸さんが声を張
り上げる。

そして、そんなキャンペーンは聞いていない。聞いてないけど、た
まにこういうことがあるから困ってしまうし、今日に限ってはもっと
困ってしまう。

（このまま近江くんのおちんぽでクリをこしこし♡ってして、イきたくなっちゃってる……ッ♡ もう少しクリ虐めたら、角オナみたいにクリイキできちやう……っ♡♡）

「お、うみくん……っ♡」

「エロい顔……」

理性と欲望で揺れているのを揶揄われるように言われ、キスをされた。

でも、エロい顔はお互い様だ。私の腰を揺さぶりながら、近江くんだって口を半開きにしている。

「たままない」

こりゅ♡ こりゅ♡

半開きにした口で、近江くんは私の乳首を食んだ。口の中に含まれた乳頭は湿った舌でくにゅ♡くにゅ♡と転がされ、背中が弓なりに

反つてしまう。

「あッ♡　だめ、それ……っんう♡　あ……っ♡」

「なんで？」

「だ、だめなの……ッ♡　もう……っん♡」

「イきそう？」

上手く口を動かせない私の代わりに、近江くんがそう言った。

図星だから答えられなかったのに、彼は確信したように続ける。

「イきそうなんだ？」

私の腰を揺さぶりながら、近江くんは自身の腰を動かした。乱暴におちんぽを擦り付けて、今度は私の口が半開きになる。

「あ、やッ♡　ああっ♡」

「ほら、もっとおまんこ押し付けてよ、槇子さん。クリイキしたいんでしょ？」

近江くんに押し付けられる快感の波は、腰を抑えられているせいで逃げる事が叶わない。どんどん大きくなって、うねっていった。

「後輩のちんぽで必死に腰振ってクリイキ頑張っちゃうなんて、恥ずかしいね？ 槇子さん」

「おッ♡ だめ、だめ、あッ♡ おーみくんっ♡」

「でも可愛いよ。このままクリイキ頑張りましょうか、乳首もちゅうちゅう♡って虐めてあげますよ」

「ひいん……ッ♡ あ、あっ♡」

溜め込み続けた快感は、乳首をぢゅううッ♡と吸われるとますます高まっていく。背中はどうどん反っていった。

（だめ、だめっ♡ だめなのにつ♡ 自分で腰動かしちゃって止まんないっ♡ イけちやう、もうイけちやう、後輩のおちんぽにクリ押し付けて、オナニーするみたい……っ♡♡ おっ♡ だめッ♡ イっ

ちやう……ッ♡♡)

「~~~~ッ♡♡」

声を上げないように口を覆い、近江くんにしがみついたまま絶頂した。子宮が収縮して、奥の方がビクビクッ♡と震えるから一緒に腰も震えた。近江くんは、その腰をがっちりと掴んでキスをする。

「はあ……っんむ……♡」

「可愛い」

いったばかりの私にまた余計な感想を言いながら、近江くんは私の乳首をくり♡くり♡と摘んで遊ぶ。収縮が終わってない子宮がきゅん♡♡と跳ねて、また口が半開きになった。

「あ♡♡ だめっ♡ んあ……ッ♡」

「まだハッスルタイム終わってないよ、榎子さん。腰動かして」
今更ながら「ハッスルタイム」って近江くんの顔に似合わない、下

品すぎる言葉だ。

それでも仕事は仕事である。息を荒くしたまま、近江くんの硬いおちんぽに再びおまんこを擦り付けた。

「俺のちんぽでクリオナしてる槇子さん、可愛い……」

「ぜ、全部言わなくていいから……っ♡」

「黙って見られてる方が好き？ 俺はそれでもいいけど」

「……っ♡」

近江くんの可愛くないところは、こういうところだ。揚げ足取りが異常に上手い。

「じゃあ、黙りますね」

そして、本当に黙って見ていられる図太さがある。

「ん……ッ♡ あ……っ、ふッ……♡」

「ハッ……」

近江くんのおちんぽにクリトリスを押し付ける私に、近江くんは何も言わなかった。ただ乳首をくにくに♡と弄りながら、興奮し切った顔で笑うだけだ。

可愛くない、と思いながら私は必死に腰を振る。

(あ、やばい……♡ またイきそ……♡♡♡)

ぐちッ♡ ぐちッ♡ ぐちッ♡

近江くんの熱い視線に、私も興奮してしまっていた。ストロークを短くして二回目のクリイキを準備し始める。もう少し掴める絶頂に、息が更に荒くなった。

『ハッスルタイム、そろそろ終了のお時間となりました!』

すると、ドンドンと重低音を響かせていた音楽が少しずつ小さくなっていた。

もう少しでイけたのに、と思う自分を必死に収めて腰を動かすのを

やめた。息を整えるフリをして、下を向く。

『本日サービスデー、サービスデーです！ 次のハッスルタイムまで、どうぞごゆっくりお楽しみください！』

ボーイの声と共に、照明が少し明るくなる。近江くんの顔がはつきり見えると、今しがた自分がしていた行為が急に恥ずかしくなった。

でもそんな私をよそに、近江くんは興奮した顔のまま言う。

「閉店までこれできるの？ マジで最高なんですけど……」

「……」

「なんなら安い」まで言うので、つつい浮かんだ下世話な質問をしてしまう。

「つていうか近江くん、そもそも何でここに……？ もしかして、こういうお店好きなの……？」

「俺が？ 本当にそう思います？」

「あ、ハイ、ゴメンナサイ」

「すぐ近くで、大学の先輩が飲み屋やってるんです」

「えっ」

「その帰りに榎子さんっぽい人がここに入って言ったから、まさかと思つて。で、受付で好みの女の子は？つて聞かれたんで、榎子さんっぽい外見答えたら本当に榎子さんが出てきて。マジで夢かと」

どんな確率以下略。

「マ、マスクしてたのによく分かったね……」

「してても分かりますよ。当然」

すりっ♡ すりっ♡

親指で乳首の周りを優しく擦られる。敏感になりきってるから、すぐに甘い声が出た。

「んっ♡」

「いっつも見てるんで」

「あッ……んん……っ♡」

「昨日着てた服、新しいのでしたね。めっちゃ可愛かった」

乳首をすりすり♡と可愛がられながら、近江くんは平然と言う。

どうやら彼は、本当に私のことが好きらしい。信じられない気持ちもあるけれど、もう信じるしかないんだろう。

近江くんはやっぱ平然と続けた。

「セーラー服も、正直そそる」

「い、言わなくていいって……っ♡」

「二七歳のヘソ出しセーラーですよ？ 日頃パンツスーツばっかなのにさあ」

「だから趣味じゃ……あッ♡」

半分けなされていたから言い返したら、お尻を持たれておちんぽを

ゴリゴリ♡と押し付けられた。硬い物体に濡れた割れ目が喜んでしま
い、咄嗟に近江くんの服を掴む。

「だ、だめっ……♡ ツ、ん……♡」

「ハッスルタイムじゃないから？」

「ちが、う……っ♡ あ、あの、本当につ……あ♡ ぬ、濡れちゃう、か
らあっ……♡」

恥ずかしいのはもちろんだ。でも、愛液で近江くんのズボンを濡ら
してしまうことが本格的に気になった。背に腹は変えられない。

近江くんは、私の言葉に口の端を釣り上げた。小さな声で聞いてく
る。

「どれくらい濡れてんの？」

「う、えっ……！」

「触っていい？」

首を傾げるように顔の角度を変えた近江くんは、ちゅ♡と軽いキスを落としてきた。

なんかずるい。甘えてるみたいに。

「下はお触り禁止って言われたけど、キャストによるんだっけ？」

「……っ」

「触っていい？ 槇子さん」

正直、触ってくれるのかと思うと、ドキドキした。

「触ってくれる」なんて思ってる時点でダメだ。私はどうしてしまっただんだろうか。

「いいなら、スカートあげて」

「！」

「ダメならいいよ」

逡巡している私に近江くんはニヤリと笑った。意地悪だ。私のこと

を好きならもつと優しくしてほしい。

でも、抗えなかった。本当に私はどうしてしまったのか。
後輩の近江くんと、これ以上気持ちよくなりたいなんて。

「……」

熱くなった指の先で、薄っぺらいブリーツを掴んだ。少しずつ引き上げる様を、近江くんは笑いながらジッと見ている。

下着が丸見えになるまでたくし上げると、彼は小さく言った。

「エロ」

「感想言わないでって……」

「エロいよ」

カリッ♡

クリトリスの位置を見定めた近江くんの指が、ぷっくり♡膨らんだお豆を下から上に引っ掻いた。強い快感に腰がビクッ♡と震え、その

仕草に笑った近江くんは、また私にキスをした。ぬるり♡と入ってきた舌が、れる♡れる♡と私の口内を楽しむ。

「ふ……っ♡ あ……♡」

「下着の色が変わるくらい濡れてる」

「い、意地悪……」

「可愛いってこと」

「うあッ♡」

ぐにぐに♡　ぐにぐに♡

今度は親指でクリトリスを押し潰され、近江くんとキスをしながら喘いだ。近江くんはちゅ♡とリップ音を鳴らすと、鼻先がくつつく距離のまま呟く。

「ピクピクしちゃって可愛い……」

カリカリ♡　カリカリ♡

近江くんの爪は小刻みに私のクリトリスを引っ搔いた。甘く、鋭い快感に腰がカクカク♡と揺れてしまう。声が漏れてしまうのも気になったから、近江くんのキスを拒んで口に手をやった。

「気持ちいい？」

「ん……ッ♡　っ……♡　はあ……っ♡」

クリトリスに集中する快感のせいで、息がどんどん荒くなる。

近江くんは、口を覆っていた私の手を絡め取ると小さく言った。

「可愛い」

同じく荒い息をする彼は私にキスをして、お互いにハアハアと吐息を漏らしながら、舌を絡ませ合った。

（なんで、こんなに気持ちいいの……っ♡）

私も限界に近かったし、近江くんだってもう限界ギリギリなんじゃないだろうか。

おちんぼは時折ピクピクと動き、腰も揺れていた。

可愛いような可哀想なような、とにかくどうしかしてあげたいような気持ちになってしまった。

「近江くん……ッ♡ んっ♡ 大、丈夫……？♡」

「何が？」

「その……これ……ッ♡」

「ちんこ？ 大丈夫なわけないじゃん、ぶち込みたい」

「ッひあ♡」

ぎりっ♡♡

クリトリスをカリカリ♡と引っ搔いていた指で、乱暴に乳首を摘まれた。子宮の奥がきゅうん♡と瞬時に小さくなつて、目の奥が熱くなる。

「槇子さんは？」

「……っ♡」

「聞こえない」

「な、何にも言っていない……ッ♡」

「言ってよ」

「だってっ……♡」

「シてほしいこと、言って」

真っ直ぐ見つめられると、何も言えなくなった。

本番行為は通常許されない。というか、そもそも相手は後輩だ。付き合ってもない。

でも、私のことが好きな後輩。

だからこそ、そんな人物に対して「性欲を満たしてほしい」なんて言うのは随分と勝手すぎるんじゃないだろうかと思った。人としても、先輩としても。

(でも……)

彼だって苦しそうだ。しかも、退勤時間までの時間は有り余っている。どうにかしてあげたいのも本音だった。

「槇子さんのためなら、俺はなんでもするよ」

いつも不遜な態度の彼が言うと、破壊力が違った。

(なんでこんなことに)

また頭がくらりと揺れる。ダメなのに。でも、このままじゃ、

「とりあえず、そろそろシミができそうだから俺のズボンおろしてくれる？」

「っ……」

拒否できるわけがない。ボーイに見えないように身体で隠しながら、近江くんのズボンを下ろしていく。

「……!!」

ズボンと一緒に下着を引き下げると、ボロンと大きなモノが出てきて呼吸が一瞬止まってしまった。

（す、すごい……こんなに大きいの初めて見た……！）

「マキさんのせいでバキバキ」

驚きと興奮が入り混じった私に気づかない近江くんは、私のキスに返しながら乳首をくりくり♡と中指で弄った。

近江くんの勃起しきったおちんぽを撫でながら、私のおまんこはじゅんじゅん♡と愛液を垂れ流してしまっている。

奥が切ない。近江くんのこれがナカに入ってしまったら、私は。

「乗ってよ」

「あっ……」

ズボンを下ろすために浮かばせていた腰を、近江くんがぐいと引き寄せる。熱いほど硬さをもつそれが、ショーツ越しのおまんこを更

に切なくさせた。

「あったかい」

変な感想を漏らす近江くんは、私の乳首をくり♡くり♡と弄りながらキスをした。ビクビクと腰を揺らしつつも、近江くんのキスに舌を絡ませて応える。

「ん……ふッ……♡ はあっ……♡」

「槇子さん、腰が動いちゃってますよ」

「ちが……っ、これは……ッあ♡」

「さすがに誤魔化せないって。おまんこ押し付けてずりずり♡しちゃってんじゃん」

「うッ……♡ あ、だ、だってえ……っ♡」

「可愛い。俺のちんぽ使っていいからもっと可愛いとこ見せて」
許されてしまうと、途端にエッチな気分になってしまったのは否め

ない。いや、元からそういう気分ではあったけれど、もつともつと、後戻りできないやつだ。

「ん……っ、ふッ……あ♡」

自分から快感を求めてしまっていた。近江さんの硬くて太くて熱いおちんぽに、下品な動きでおまんこを擦り付ける。

濡れてしまった下着がにちに♡と恥ずかしい音を立てたって、気にならなかった。だって近江くんは気にしない。むしろ、それを良しとするだろう。

「かわい……」

私の推測を証明するように、近江くんは快楽を貪る私に夢中だった。興奮を隠せない目を隠くそうともせず、じいつと見つめてくる。

（見られるの恥ずかしいのに、腰揺らすの止まんない……っ♡）

「あッ……んっ♡ 気持ちいいッ……♡」

「おまんこ擦り付けるの上手ですよ、槇子さん。世界一可愛い」

とんでもない褒め方をされているけれど、近江くんは多分本気なんだろう。そんな顔をしていた。

だから私はもっともつと、と擦り付けてしまう。甘イキをしても、もっともつとイきたくてまたおまんこをぬりゅぬりゅ♡と擦り付ける。

「はあ……っ、あ、……ッ♡」

そんな浅ましいことに二人で没頭していたら、さつきとは違うボーイが、マイク越しに声を張り上げた。没頭を邪魔されたけれど、それでも私の腰は止まらなかった。

『大変お待たせいたしました、ハッスルタイムのお時間です！ 本日増量！ 増量です！ サービスデーとなっておりまあす！』

再びドウンドウンと音楽が鳴り響き、照明が暗くなっていく。

途端に、周りの席から「あ、ダメえ♡」とか「やあんっ♡」とか明らかにお楽しみになっていいる声上がり始めたから近江くんと目が合った。

「槇子さん」

すっかり荒くなった息で腰を振ることをやめられない私は、近江くんにキスをされてまた膣の奥を狭くした。

「ん……♡」

「俺たちもハッスルする？」

「で、でも……あ♡」

「俺はいいよ。槇子さんとやれるなら、なんでも」

「ッ……♡」

もう、私次第でしかない。近江くんは私に選ばせようとしてる。私

が逃げられないように。

私が彼のモノを握って、角度を変えない限り『本番』はあり得ない。

彼はそれまで一切動きはしないだろう。それはもう痛客の如く、やつてもらって当たり前みたいな態度で。

「槇子さんが好きだから、なんでもいい」

（ずるい。可愛くない）

なのに、どこかで「健気で可愛い」と思ってしまった。一体、私のどの部分が思ってしまったているのだろう。

（もう、分かんない）

諦めに似た何かに気づいてしまうのと同時に、身体が動いてしまっていた。

硬さが一向に衰えない近江くんの怒張をそっと掴む。その太さにま

た密かに驚きながら、私は腰を上げた。

近江くんが可愛く呟く。

「やった」

彼の素直な感想を無視をしながら、濡れそぼったおまんこにぴとつとおちんぼを添えた。

「あ……っ♡」

どうしても溢れてしまう声をなんとか堪え、おちんぼをぬぷ♡と飲み込んでいく。

腰を落とせば落とすほど、ゾツとするような太さに気付かされる。

悦びで瞬きが増えてしまった。

(あ、すごいっ♡ これすごいっ♡ こんな初めて入れる……っ

♡ 絶対気持ちいい、絶対好き……♡♡)

興奮がバレてやしないだろうか。冷静ぶった表情を努めながらも、

内心嬉しくてたまらなかった。

今までしてきたセックスが全て霞んでしまうくらいだ。どう足掻いたって違う。これが奥まで出たり入ったりすることを考えると、どうしたって「早く」「早く」と気持ちが急いてしまう。

負けだ。心底負けだ。近江くんは、近江くんのおちんぽに勝てるわけがない。負けてるのに、興奮してしまっている。やっぱり負けだ。

「あーっやっぱ……」

近江くんもまた興奮していた。私の興奮に気づいていないような彼は、息を吐きながら私と繋がった部分を見下ろしていた。

隣のVIPルームも、その隣も、甘ったるい声で「いいっ♡」「すごい……っ♡」と喘いでいる。

その声を聞きながら、近江くんは私の腰を掴んだ。ぼそつと言う。

「これ、見つかったら出禁？」

「だ、大体、黙認されてる、かな……」

「なら良かった」

とんッ♡ とんッ♡

近江くんの腰が、小さく揺れる。奥へ奥へと入り込もうとする動作に、私の声も周りのキャストと同様に甘ったるくなっていた。

「あ、あッ♡ だめ、急に……っ♡ んッ、あッ♡」

「いや、無理。槇子さんに入れてのに我慢とかできない」

「ッ……♡ あ、んう……っ♡」

「エッロ……」

息が詰まりそうなほど大きな怒張に動かれると、膣壁はやっぱりすぐに敗北した。

激しくない動きなのに、奥がとっッ♡とっッ♡と容易く叩かれている。声を出しちゃいけないのに、勝手に溢れてくる。口を手で覆っ

て、近江くんにしがみついた。

「気持ちい……」と近江くんが呟く。本当に気持ちよさそうな声は聞いたこともない色気があった。子宮の奥が、殊更熱くなる。

（だめ……♡ ほんとに声、抑えられない……♡♡ 近江くんのおちんぽ、気持ち良すぎて勝手に……♡♡）

このままじゃやばい。そう思い、私の腰を掴む近江くんの手を慌てて掴んだ。

「待、って……♡♡ 本当に、声、ん♡♡ 出ちゃう、から……♡♡」
「ん……」

はあ、はあと荒い声をした近江くんが、動きを止める。すると私の背中に手を回して、ぎゅうと抱きしめてきた。近江くんに引き寄せられて、少しでも角度が変わったおちんぽに小さく「ん♡♡」と声が出る。

「俺も出そう……」

そんな彼の切羽詰まったような声に、今度は胸がつんとした。

どうして、つんとしたんだろう。分からなくて言葉を出せずにいると、近江くんは小さく言った。

「槇子さん好き……」

「っ……」

「はは、締まった」

「ち、ちが……!」

「可愛い」

れろっ♡　ちゅうッ♡　ちゅぱっ♡

唐突な愛の囁きに反応してしまった私をからかった近江くんは、反論も碌に聞かずに乳首を口に含んで、舐めたり吸ったりと可愛がる。

「あっ♡　あ、だめ……♡　今しちや……っん♡」

「可愛い」

れろれろ♡　くにくに♡

ぬちっ♡　ぬちっ♡　ぬちっ♡　ぬちっ♡

近江くんは口の中で私の乳首を転がしながら、小さなピストンを再開させた。

ほとんどゆさゆさと揺らされているだけなはずなのに、ナカでは大きなおちんぼがずちずち♡と蠢いていて気持ちがいい。快感に声が抑えきれず、唇の端にキュツと力を入れた。

（だめ、だめ、こんなのイっちゃうっ♡　ちよつと動かれてるだけなのに、おまんこ気持ちよくてイっちゃうよお……っ♡♡）

徐々に膣内が狭まっていく。気を抜けばすぐにでもイってしまいそうなのに、近江くんは低く言った。

「俺のものになつてよ」

はあはあと荒い息のままキスをされる。途端に膣内はブレーキが壊れたみたいに、きゅうううう♡と小さく小さくなっていた。

「槇子さん」

「あ、ああ……ッ♡　だ、めえ……っ♡♡」

「好き」

「ッ♡　ひっ……、ッ♡　あッ、あっ♡♡　だめ……ッ♡♡　キ

ちや……っ♡♡　あ……っ♡♡♡♡♡」

後輩に「好き」と言われて、その拍子にイってしまふなんて人生で考えたこともなかった。しかも、セーラー服を着て。しかも、おっぱいで。

考えたこともなかった事態に戸惑っていたら、またもやボーイの声がホールに響いた。いつもの声なのに、やけにうるさく感じた。

『さあさあ！　まだまだ続きます！　みなさんどうぞ盛り上がっ

ちやつてください!』

近江くんは、こう言つてはなんだが意外にも私の絶頂をからかわなかつた。むしろ真剣の声で「槇子さん」と私の名前を呼び、大真面目な顔でキスをする。

「んっ……」

求められてる感じがすごい。まるで恋人同士みたいだ。下品な服を着て、下品な場所で、こんなにも下品なことをしているのに。

「好き」

「……っ♡」

再び降ってきた言葉で、達したばかりの子宮が馬鹿みたいに反応してしまう。それを見逃してくれない近江くんが、下からおちんぽを軽く突き上げてきたから「あ♡」と油断した声が出た。

「やあッ……♡ あっ♡ んうッ♡」

「声我慢しなくていいの？」

「だって、下からされたらっ♡ あ……ッ♡」

「じゃあ榎子さんが動く？」

「え……っ」

「隣のキャストさんみたいに」

近江くんが隣のVIPルームを顎で指す。暗くてほとんど見えないけれど、影はセックスの動きそのものだ。おっぱいを押し付けて、

「気持ちイイっ♡ すごいっ♡」という声だつて聞こえてくる。

「早くしないと、ハッスルタイム終わっちゃいますよ」

「わ、分かったから……っ♡」

もはや、取り繕う余裕も理由もない。

顔が近くてぶつかりそうだったから、近江くんの首にしがみつく。肩に顔を寄せて、急かされるがまさに腰を前後に動かした。

（あ、すごいっ♡ ずっとイイとこ当たってるっ……♡）

「はあ……ッ、んっ♡ あっ♡」

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡

近江くんのおちんぽを自分のイイところに擦り付けながら、近江くんに腰を押し付けた。

耳元で近江くんの声がする。

「やば……」

「んっ♡ ツ、あ♡」

「気持ちい？ 槇子さん」

「ん、気持ちい……っ♡ すご……ッい♡」

「腰振り上手ですね。いっつもしてるから？」

「ほ、本番はしてない、って……っ♡」

「してないのに上手なのも腹立つけど。あー気持ちい……」

一から百まで勝手なことを言う近江くんは私の腰を抱くと、余った手で乳首をくり♡くり♡と弄った。しっかりと摘まれて、倒されて、快感がビリビリと膣に溜まっていく。

「や、くりくりしないでえ……っ♡」

「金払ってんだからいいでしょ。せっかくだから槇子さんのエッチな声いっぱい聞きたいじゃないですか」

「あんっ……♡ はあっ……んっ♡」

「マジで可愛い。録音したい」

「ば、ばか……っ♡」

「自分から腰振って後輩のちんぽでアクメしようとしてるくせに、今更なに先輩ぶってんの？ 後輩ちんぽって分かってても我慢できないほど気持ちいいんでしょう？ ねえ？ あの仕事にドライな槇子さんが」

「それは……ッあ♡♡」

「槇子さんの奥に俺のがコツコツ♡って当たってるの、分かる？ 子宮口降りてきちゃってますね。またイきたくなってるんですか？」

「や、あッ……♡ 近江く……っ♡」

「答えて、槇子さん。このままアクメしたいんですよね？ それとも、ここでやめていいの？」

可愛くない。可愛くない。可愛くない。

なのに私は腰をいやらしく揺らすのをやめられない。イきたくてイきたくて、近江くんの思うようになるしかなかった。

「だ、めえ……っ♡ やめないでっ、あッ♡ こ、このままっ♡ アクメしたいのお……ッ♡♡」

懇願に近いおねだりをする、近江くんは眉間に皺を寄せて笑った。

「後輩ちゃんぽで腰へこへこさせちゃって……榎子さん、本っ当に可愛い」

ほとんど唇が触れ合ったまま言われ、膣がきゅうつ♡と絞られる。

「締まってきた。イっちゃうの？ 榎子さん」

「ん、キちゃう……っ♡ あっ♡ あっ♡」

近江くんの服を掴む手に力を込めて、腰を振るスピードを上げる。すると近江くんは、無防備な乳首をカリカリカリ♡と引っ搔いて私の絶頂を手伝った。

「あっ♡ だめッ♡ それだめ、イっちゃう、イっちゃうから……ッ♡」

「お客さんに延長媚びるときみたいにイって。じゃないとちんぽ抜くよ」

「やあっ♡ あ、あ……ッ♡♡」

近江くんの綺麗な二重が私を見ている。

恥ずかしい。恥ずかしいけど、このままイきたい。このまま、近江くんにイかされたい。

「イっちゃうっ♡ イっちゃう、イっちゃいますっ♡ 後輩ちゃんぽに自分で腰振って、おっきいアクメしちゃいますっ♡」

「おっきいアクメしたいの？」

「したいっ♡ したいのっ♡ おっきいのキちゃうっ♡ あ、あっ♡ 近江くんっ♡ 近江くんっ♡♡♡ イっちゃうっ♡ イっていいっ？♡ イくっ♡♡ あっ♡ ああッ♡♡」

「可愛い……。いいよ、槇子さん。そのまま腰振って後輩ちゃんぽでアクメして。顔こっち」

近江くんが早口で色々言ってきたながら、触れるだけのキスをしてきた。指は相変わらず私の乳首をかしかし♡かしかし♡と引っ搔いてく

る。小さくなった子宮は、順当に順当に絶頂に襲われた。

「ああ……ッ♡♡ だめだめだめ……っ♡ あ、イクっ♡ イクイク
イクっ……ッ♡♡♡♡」

近江くんの肩に喘ぎながら、無意識に下を向いたまま絶頂した。近江くんが「顔見たかったのに」と文句を言いつつ私の顎を掴んで、再びキスをしてくる。

空いた手は敏感なままの乳首をくにゅくにゅ♡と弄るから舌を絡ませながらも高い声が出た。

「あ……っ♡」

「槇子さん……俺もイきたい」

本来跳ね除けるべきお願いだけれど、跳ね除けられるはずがない。

近江くんは乳首を弄られながら小さな声で答えた。

「な、ナカは……だめっ……♡ んッ♡」

「分かってますよ。……手でやって」

「手でやって」と言う声がやたらと弱々しい色をしていたから、少しだけ可哀想に思った。普通に気持ちよくイけたのは私だけだから、そんな色をしてしまうのも仕方がない。

近江くんのおちんぽを膣からずるッ♡と抜き、手で扱いた。

丸太を思い出すような大きな怒張は私の手では扱きづらかったし、愛液が乾いてカピカピするのも可哀想だったから唾液を絡ませる。すると近江くんは「最高……」と小さく呟いた。たまにそうやって変な感想言うの、やめてほしい。

「榎子さん、キスして」

余裕のなさそうな表情だったから、嗜める言葉が思い浮かばなかった。

おちんぽを周りから隠すようにして近江くんの膝に乗り、キスをす

る。近江くんは舌を絡めながら、また私の乳首をこねこね♡と弄った。

「近江く……っ、ん♡」

「声聞いたらすぐイけそう」

そう言われてしまったら、叱ることもできない。私はもう黙って乳首をこり♡こり♡とい弄られながら、近江くんのおちんぽを抜くしかなかった。

「あー槇子さん。やばい、出る……」

唾液を足す必要もない速さで少しホツとした。

舌を絡める余裕がなくなつた彼を、可愛いと思つてしまう。なんだかんだで後輩なのだ。許可を出すときは、つつい上からの口調になつてしまう。

「いいよ」

目を見つめて言う、近江くんは綺麗な目を歪ませて小さく呻いた。

ああ、可愛い顔だ。これヤバいかも。

何がヤバいのかはあえて考えなかった。その隙に、手の中にはじわりと温かいものがびゅるるる♡と集まっていく。

「いっぱい出たね」

射精がなかなか終わらなかったから思わずそう感想を漏らしてしまふと、近江くんは私にまたキスをした。さつき絡められなかった分の舌、みたいな勢いでくちゅ♡くちゅ♡と絡められて、隙間から熱い吐息が漏れてしまう。

「はあ……っ♡ん……♡」

やがて、ハッスルタイムの終了を知らせるボーイの声がホールに響いた。

照明が明るくなってしまったから、手に収めたままの精液を拭きたくて「ティッシュ……」と呟く。近江くんはソファのサイドテーブルに置いてあるティッシュを見つけると鼻で笑った

「『本番』用じゃん」

私もそう思う。おしぼりがあるんだから、本来この場にティッシュなんて必要ないのだ。

『本番で出された精液』用のティッシュを掴んで、彼の精液を拭き取った。近江くんがそれを私の手から奪う。ポイッとゴミ箱に投げると、綺麗に吸い込まれていった。

「あと何時間？」

時間がないと急くような彼は、また私を抱き寄せてキスをした。

「お、近江くん、これ以上はバレるから……」

「わかった」

それから閉店まで、ずっとキスをしたり乳首を弄られたりした。合間にお酒を飲んで、またキスをして、近江くんはたまに「あー好き」とどうしても漏れるように繰り返す。

『ハッスルタイムのお時間ございます！　いらっしやいませ、ありがとうございます！　どうぞいます！　どうぞいっぱいおっぱい揉んじやってくださいーい！』

そんなボーイのマイクパフォーマンスが響けば、私は近江くんの膝の上で腰を動かした。

お酒に流されることも場に流されることもないと自負していた私だけれど、最後の方は近江くんに乳首を虐められながら、必死に濡れた割れ目を擦り付けてしまっていた。

近江くんは意地悪なんて言わなかった。吐息が聞こえる距離で「可愛い」「槇子さん」「好き」と惚けるように漏らしては、私の一番奥

をシクシクと震わせるのだった。



「お疲れ様です」

そんな情事を繰り広げたとはいえ、賢者タイムは誰にでも等しく訪れる。

私にも訪れていたし、お店の外で待ち構えていた近江くんにも訪れているようだった。店で見せた顔とはうって変わっていつもの「すん」とした表情だ。普通に気まずい。

「で、出待ちは禁止だよ」

「それは知りませんでした。以後気をつけます」

以後って。何をどう以後気をつけてくれるんだろうか。そんな疑問は湧いたが、詳しく聞くのは躊躇われたからやめた。

「終電乗るんですよね？ 送ります」

「い、いいよ。別に」

「最寄りまででいいので。お願いします」

「……」

なんでお願いされているのか。

そして、後輩にお願いされると弱い私がいる。結局最寄り駅まで近江くんを送ってもらうことになった。

終電は、帰宅する人たちでごった返していた。近江くんが車両に乗り込むとなぜかみんな道を開けてくれる。おかげで私たちはドア付近を陣取ることができたし、近江くんは私を隅っこに置いてくれた。

「どうにもこうにも彼氏です」みたいな顔で、そのまま壁になってくれる。

（安心感がすごい……）

いつもなら、息を潜めながら湖のほとりを妄想しているとところだ。密かに感謝していると、近江くんは電車の走行音に少しだけ勝る声で聞いてきた。

「次の出勤、いつですか？」

「……来るの？」

「出勤と同時に指名します。退勤まで」

「破産しちゃうよ」

「まあ、その金をあなたに直接渡した方がよっぽど合理的ですよね」

「受け取れるわけないでしょ……」

「仕事の対価としてなら受け取れるんですか？」

「う……」

「合理主義なら、どっちがいいかなんて考えるまでもないと思いますけどね」

「え、私って合理主義なの？」

「クソみたいな合理ですけど」

「……」

褒められてはいいことだけは分かる。何かに負けた気がして、つい言い返してしまう。

「だって、早く仕事辞めたいんだもん。投資ガチってFIREして、湖のほとりに小さい家買って、そこに住むの」

「リアリストなのか頭お花畑なのかどっちかにしてください。もつと他に手があるでしょうに」

近江くんが私の顎を掴んでぐいっと上げた。近江くんの身体と話し

ているみたいな角度から、近江くんの顔に吸い込まれるみたいな角度になる。

場所は変わらないのに、断崖絶壁にいるような気分だった。

「身近にこんだけ都合のいい存在いるんだから、都合よく利用してくださいよ」

「……！」

「そんなに投資をガチりたいなら、二人で分散投資した方がどう考えたって早いでしょ」

議論の余地もなくそれは合理的だ。そして都合がいい話でもある。私にとって。

あれ？ 近江くんにとっても都合がいい？　じゃあこれは合理？
あれ？　あれ？

自分の合理と、彼の合理がぶつかって混乱した。

近江くんが「ちなみに」と付け加える。その声はやたらと甘くて、キスをされるのかと身構えてしまうけれどさすがに杞憂だった。

近江くんは甘い声で、でも淡々と言う。

「一緒に住んだ方が節約になるし、その分も投資に回せますよ」

「え、えっと……！」

「何を躊躇する理由があるんですか？ 節約だって協力しますよ、俺は」

「だってそれは……っ」

「夏は裸で過ごして、冬は暖房つけずに抱き合って寝ればいい話でしょ」

え、そんな話だっけ？ なんか違うくないか？

ガタンガタン！と電車が大きく揺れたタイミングで、これ幸いにと下を向いて黙った。近江くんは上の方で小さくため息をつく。

これ以上、私をどこに追い詰めるというのだろうか。

「俺、体温高いから冬は有利ですよ」

有利とは。最後の追い詰め方、なんかズレてるよ近江くん。

下を向いたまま、彼にバレないように笑ってしまった。気づかれたらまた面倒なことになりそうだから、そのまま黙る。

可愛いのか、可愛くないのか。どっちかにしてほしいな近江くん。